

[研究ノート]

参加型アクションリサーチは、なぜ求められるのか —質的調査の道徳的基準をめぐって—

Why Participatory Action research is required? On the Moral Standard of Qualitative Research

高田 正哉
TAKATA Masaya

[要旨]

本研究は、近年主にアメリカ合州国にて推進されている「参加型アクションリサーチ」がなぜ求められているのかを、その背景となる理念を考察することから探究するものである。「参加型アクションリサーチ」は、質的調査の方法論のひとつである。質的調査は、その発端からどのように客観性を担保しうるか検討されてきた。近年のポストモダンの転回を経て質的調査は、客観性を追求する科学から、調査対象と協働する学問として再定義されつつある。その意味は、そのフィールドにいる他者に応答することにあるのである。このような応答こそ、質的調査の根本的な存在事由であることを、結論にて示した。

1. 問題の所在～挑発的な問いと、その研究のあり方について

参加型アクションリサーチ (participatory action research) は、なぜ求められるのか？ 本研究はそのような挑発的な問いからはじめようと思う。この問いに対して、筆者は、「参加型アクションリサーチ」が社会研究をすすめる条件となっているからである、という答えを議論のなかで示す。

本研究で検討の対象とするのは、主に社会科学における調査法 (methodology) のひとつであり、伝統的に「質的調査」(qualitative research) と言われる調査である¹。本調査において「質的調査」は、社会統計やモデル分析のような間接的に社会的現実を捉える手法を採用する「量的調査」(quantitative research) と対照的に、フィールドワークやインタビューなど対象のあり方 (生活史、ナラティブなど) から直接的に社会的現実を捉える方法のことと定義している [グリーンウッド、レヴィン：2006年、71頁]。だが、ここで「直接的」という言葉で意味し

ていることは、曖昧である。というのも、対象に「直接的に」関与するということは、関係性に多様な深度が存在しているからである。対象と、どのような距離感で接するのか？ 対象への関わり方で、社会的現実が変わることを許容するのか？ 対象の語りを語りなおすこととは、対象の語りそのままでありえるのか？

以上の問いに対して、「質的調査」の理念的なあり方について多くの先行研究によって考察されている。そのような先行研究の中で、特にアメリカ合衆国の社会学・心理学・社会心理学の調査法研究は、調査者ある人びとがいる世界へのコミットメントの必要性を訴えている。そのような主張をする代表的な研究者であるノーマン・K・デンジン (Norman K. Denzin) は、質的調査を「道徳的・寓話的・治療的なプロジェクト」[Denzin: 2019, p.7] であると定義している。デンジンは、近代科学による社会的現実の客観主義的な研究が不可能になったと考える。その中でデンジンがそのオルタナティブとして示すのが、多様性のなかへ調査が入り、その世界のあり方・正しさを受け入れていく調査である。デンジンは、質的調査に関する理念的な研究を1970年代から続けてきているが、特に1990年代においてポストモダンの転回 (postmodern turn) を踏んでいる。デンジンによると、「ポストモダンの感受性 (postmodern sensibility) は、書き手が彼ら自身のテキストに身を置くこと、発見、あるいは探究のような創造的な行為 (creative act) としての書くこと (writing) に専心することを促進する」[Denzin: 2009, p.93-94] と述べるような、あるテキストが描写され、共有される世界のことである。このような世界は、あるテキストの世界が多様に存在し、それゆえその世界のあり方に応じた個々のあり方・正しさが構築されていくのである。このように、対話のなかで調査者自身の正しさを変容させながら、「ある世界のあり方」を受け入れ記述することが、デンジンの示す「ポストモダン」の方法である。この作業は、「ある価値のみが正しい」と考える世界をゆるがし、変容させる力をもつ。

質的調査はある世界を構築する現場、すなわち教育の場においても重要性を帯びてきている²。批判的教育学 (critical pedagogy) の第一人者であるピーター・マクラーレン (Peter McLaren) とジョー・キンチェロー (Joe Kincheloe) は、先述したデンジンらが編集した『質的研究ハンドブック』(The Handbook of Qualitative Research, 1994, 邦訳2006年) において「批判理論」に基づいた質的調査の必要性を述べている。それは、「批判理論は個人のエンパワーメントの文脈において最もうまく理解できる。批判的と呼ばれることを望む探究は、特定の社会は社会の公的領域の不正と向き合う試みとなんらかの関連をもつものでなければならない」[キンチェロー・マクラーレン：2006年、256頁] ということである。ここで述べられていることとは、質的調査において求められる探究は、ある社会的な価値にコミットし、社会的な不正と向き合うという目的のために行われるということである。そのためには、社会的な不正に今まさにいる対象 (個人、集団) にアプローチし、その対象にコミットするということが求められるのである。社会科学は、ある社会問題について探究するものである。それは、ちょうど著名な社会学者ハワード・ベッカーが、「われわれの調査対象 (subject matter) と、われわれの立ち位置 (disposal, 社会学研究のことと思われる、筆者注) における異なる方法で行われる研

究との大きな多様性において、社会構造に確かに基礎づけられたいくつかの理由によって、われわれは誰かの側に立つ (take sides) ことを避けられない」[Becker: 1967, p.239] と述べるように、われわれ調査者はある価値にいてしまうのである。われわれは、ある価値にコミットし実現しようとするを、必ず行ってしまうのである。

先行研究における質的調査の理念は、調査者自身がある立ち位置にいたうえで、調査行為が行われることが論じられている。そのような調査のあり方は、特にポストモダンの転回を経た現在においては、自明なことのようと思われる。だが、その調査が調査対象や調査後の社会にどのような影響を与えるのか、その理念は絵に描いた餅のようなものが多い。それを具体化する試みはあるものの、それはあくまで局所的なものとなっている³。本研究は、そのような状況に対して、ポストモダンの転回以後の質的調査のあり方が、「参加型アクションリサーチ」に多かれ少なかれなるということを示していく。

2. そもそも、質的調査はどのような学問なのか？

そもそも、質的調査はどのような学問であるか。この問いは、質的調査がどの程度「客観的」(objective) な科学でありうるかという問いと表裏をなす。「どの程度『客観的』な科学であるか」という問いはまた、調査者各々はどの程度「客観主義」(objectivism) にコミットするのか／すべきなのかという問題ともつながる。だが、質的調査を客観的なものにするこのことについてマーティン・ハマーズリーらは、「客観性 (objectivity) を維持することは、決して簡単なものではない。それは、いくつかの特定のケースへの調査の仕事と関連する／しないものはほとんど明確に区切れないこと、およびわれわれは無関係なことを考慮することに影響されつづけることに気づかないということが理由である」[Hammersley et. al.: 2012, p.48] と説明する。客観的な調査は、「どのような調査が客観的とみなされるべきか」ということの定義が求められる。だが、その定義が「客観的」であるか否かもまた、求められるだろう。その結果、「客観的な調査」の定義は、無限後退していくのである。

普遍化された調査は、人間の行為 (human behavior) を画一化された規格で定義することを可能とする [Kincheloe: 2008, p.47]。このような厳密な定義を見出すことこそ、近代科学の条件であると見なされる。だが、この「普遍化」というプロジェクトは、あらゆる場面で無効となりつつある。このことについてデンジンは、以下のように述べる。

その歴史のはじまりから、質的調査を用いるものは、ある小さな信念の集まりへの傾倒が見られた。その傾倒には、客観主義 (objectivism)、そして調査される行為 (behavior) あるいは経験を理論的に解釈すること (theoretically interpret) が含まれていた。これらの信念は、植民地主義 (colonialism)、白人的で家父長的な資本主義 (white, patriarchal capitalism) のグローバルポリティクスへの追認という、実証主義の伝統へ与みしている。そのような実証主義的な装置でも調査されうるだろうが、人種的・社会的な正義 (racial and social justice) と白人の特権の問題とポリティクスを放逐するこ

とはできない。[Denzin: 2019, p.5]

ここでデンジンが述べることは、社会科学の「客観主義」は、白人的で家父長的な資本主義のポリティクスというあるひとつのイデオロギーにコミットすることであるということである。この問題は、客観主義的な科学へのコミットへの道徳的・政治的な問いをもたらす。批判的教育学 (critical pedagogy) の第一人者であるジョー・キンチェローは、「実証主義は支配のための哲学的・政治学的な強制 (force) である」[Kincheloe: 2012, p.15] と述べる。というのも、実証主義は「子ども・教師・民主主義・正義・教育改革を気づかう人びとへの中央からの排斥 (objective) となる」[Kincheloe: 2012, p.16] からである。この排斥は、単なる地位的な排斥ということの意味しない。あるところにいる、まさにそこにいる子どもや教師の生活それ自体を、政策的な決定や定義として排斥することになるからである。

このことは、「教育現場や子どもたちを省みない知識」は調査とは言えない、という主張ではない。この排斥は、デンジンが述べるように、「調査者は自身のもつ価値の立ち位置するかを明確にしなればならず、それには自身の立ち位置と付随するいわゆる事実とイデオロギー的な推論が含まれている」[Denzin: 2019, p.19] という言葉で理解される。調査者は、ある場所で、ある人ともに、あることを大切にしているという事実、そしてその事実のなかで持たざるをえない自らの立ち位置を自覚しなければいけないということである。この自覚がないままの調査は、「誰のための知識か」(knowledge for whom) のない空虚な調査に成り下がってしまうのである。それは同時に調査者(欧米圏において、その多くは中上流階級の白人男性である)が、無意識に自己の価値を調査のあり方に組み入れてしまうことと、同じになりうるのである。

このように、客観主義的な科学もまた、「画一化した規格で人間の行為を定義する」ということ、そしてその背景にある「白人的で家父長的な資本主義のポリティクス」へのコミットにすぎないのである。どのような調査のあり方を受け入れるに関わらず、自らの調査行為の政治的・社会的なあり方は自覚されざるをえないというわけである。それゆえに、調査者は常に自身がどのような価値にコミットするのかを明確にしていく必要がある。

3. 調査者と調査対象は、探究する

客観主義的な質的調査はもはや不可能であり、ある価値にコミットすることが質的調査を行ううえで求められていることが明らかになった。

では、質的調査を行う調査者は、その価値をいかにして明確にしていくのだろうか。この問いは、調査者の反省的思考が求められる。ここで「反省的思考」とは、調査者がある調査対象にもつ偏見 (bias) を自覚するというだけではない。というのも、偏見を自覚することは、事後的なふりかえりの中で問題とされるからだ。質的調査を行うということは、調査者が調査対象と関わりながら行われるものである。それゆえ、その自覚は、調査者にとっては有意義なものであっても、調査対象にとって有意義かどうかはわからないのだ。このことについてデン

ジンは以下のように述べる。

反省的インタビューは、それ自体は収集のツールであるというわけではない。それは、あなたがあなたのために集めてくる誰かを雇うような、あるいはあなたがあなたに与えてくれる誰かに給与を払うような商品 (commodity) でもない。反省的インタビューは、道徳的コミュニティに属しているのだ。この点において、わたしはレオポルド (Leopold) から引用しようと思う。レオポルドは、土地について次のように述べている。「私たちは、私たちに属している商品 (commodity) として土地を見ている故に、土地を乱用している。私たちが土地を私たちのコミュニティに属していると見たら、私たちは土地を愛と敬意をもって使いはじめるであろう。」私たちは、土地を所有しているのではない。土地は私たちに属しているコミュニティなのである。[Denzin: 2009, p.216.]

ここでデンジンが示すこととは、質的調査の担い手は、調査者だけではないという事実である。というのも、質的調査は本質的に調査者と調査対象との対話を構築するからだ [Denzin: 2003, p.67]。調査者と調査対象との関係は、情報の受け手と提供者というものではありえない。インタビューやストーリーテリングの過程において、調査者と調査対象は、声を聴きあっているからである。声を聴いてしまうという事実は、「調査」という文脈を超えて、ある個人と個人とをつなぎ合わせる。

それと同時に、声を聴くということは、その人の感情・思いを引き受けることである。その過程において、聴くこと／聴かれることで、経験の変容が生じる。このことについてキャロリン・エリスは、以下のように述べる。

それゆえに、パフォーマンスを目にした聴き手は、言葉以上のことに左右される。聴き手は表情 (facial expression)、動き (movement)、ジェスチャー (gesture) を目にし、また声のトーン (tone)、イントネーション (intonation)、抑揚 (inflection) を耳にし、パフォーマーの情熱を感じるのである。聴き手は、普遍性から離れ、そして具体的なものを扱うようしむけられる——特定の人びとの、特定の場の、顔を合わせた出会いに
いるのである。[Ellis et. al: p.80]

調査者としてある人と、ある場で出会うということは、その人のあり方を相互に承認しあうことでもある [Gabriel: 2015, p.334]。というのも、質的調査は、調査者・調査対象いずれが欠けても成り立たないからである。調査者は、調査対象のあり方にふれ、自らの認識のあり方を変容させられる。調査対象は、調査者から傾聴されることで自己自身の存在に気づき、また対話のなかで、自らの気づかないあり方を自覚させられる。

このような調査は、ケア (care) の世界を成り立たせる。調査者は、調査対象のいる世界に入る。デンジンはまた、調査者と調査対象との「コミュニタリアン的なケアの倫理学」

(communitarian ethics of care)の重要性を指摘し、「相互尊敬(mutual respect)、品位(dignity)、そしてつながっていること(connectedness)を価値づける関係性倫理学(relational ethics)、そして他者と関係ある自己からはじめるという世界構成倫理学(a world-making ethics)」[Denzin: 2014, p.28]と述べる。調査者と調査対象とが、相互につながる世界をつくりあげることこそ、質的調査の本来のあり方なのである。

4. 「参加型アクションリサーチ」は、求められる

調査者と調査対象とは、ある世界を共同して構築しなおしていると、先の章で示した。そのような調査のあり方は、伝統的な質的調査とは異なる。というのも、調査者は調査対象に意識的に介入する(intervene)しているからである。と同時に、「調査者と調査対象とが、相互につながる世界をつくりあげること」は、ある価値へのコミットのなかでしかなしえない。というのも、ある人の声に応えるということは、その人への立場へコミットすることなしになしえないからである。このようなことを踏まえた調査のあり方が、「参加型アクションリサーチ」である。

「参加型」(participatory)という言葉は、一見するとその意味が自明のように思える。その意味とは、調査者が調査対象にいる世界に参入するという事だろう。だが、「参加型」という言葉の意味は、単に調査対象となる世界に参加し、観察に徹することでも、参加者(例えば教科教育における授業者)だけによる内省的な調査でもない。ここで、ごく初期にその定義を行ったロビン・マクタガートによる定義を示す。「アクションリサーチは、自己反省的な探究(self-reflective enquiry)の形式だといえる。それは、合理性、正義、一貫性、満足というものを改善するための社会的状況にいる参加者によって担われている。参加者が改善するものには、(a)参加者の社会的実践、(b)参加者の実践への理解、(c)実践が実行される制度、プログラム、そして突き詰めれば社会それ自体というものが含まれている」[McTaggart: 1994, p.317]。ここで重要なことは、参加者が自己自身のいるコミュニティに関するふりかえりをしつつ、そのふりかえりを社会変革につなげるということである。それは、「社会調査(と社会生活や社会における個人的経験)の新しい哲学であり、第三世界の社会の変革としばしば結びついている」[ケミス・マクタガート: 2006年、230頁]のである。

このような参加型アクションリサーチのあり方はまた、デンジンの次の言葉から理解される必要がある。「適切に概念化されることで、質的な探究は、市民的・参加的・協働的なプロジェクトとなる。そのプロジェクトは、調査者と調査対象を共同した道徳的プロジェクトへの共同参加者(co-participants)へと変容させる。これが、参加型アクションリサーチの形式である」[Denzin: 2019, p.18]。調査者と調査対象は、社会変革のためにアクションリサーチに従事する。そこには、道徳的な世界の実現というプロジェクトがあるのである。このような参加型アクションリサーチのあり方について、「若者による参加型アクションリサーチ」(Youth Participatory Action Research)を研究するジュリオ・カμμαロータ(Julio Cammarota)ら

は以下のように述べる。

若者の参加型アクションリサーチは、若者たちに、不正義の条件(condition of injustice)は自然なものではなく生産されており、特権と抑圧をつくろうとし、しかし突き詰めれば挑戦でき、それ故変えることができるということを教える。これら各々のプロジェクトにおいて、若者たちと大人たちの同盟は、権力への多世代が集まって分析することのバイタリティを経験する。私たちは、批判的な探究と抵抗によって私たちの魂を強化し涵養することができるということ、そして同時にこれらのプロジェクトが社会変革の呼び潮(ripple of social change)を呼びおこすということを学ぶのである。[Cammarota et al: 2008, p.2]

参加型アクションリサーチにいる参加者は、調査者であれ市民であれ、自らの社会的、政治的な困難を言葉にする。その困難さは、他の参加者の耳へと到来する。調査者はまた、あるコミュニティに入ることで、その困難さを耳にする。参加型アクションリサーチは、このような声の聴きあいによるケアを実現する。そのことは、デンジンが述べるように「アクションを呼びかけるにおいて、調査者は未来に状況を変革する具体的なステップに従事する」[Denzin: 2019, p.19]のである。このように参加型アクションリサーチは、ある未来に向けて、あるコミュニティにおいて、ある特定の人びとと共に、その社会的、政治的な困難さを理解し、変革していくプロジェクトなのである。そのような中において、道徳的に応答していくことこそ、調査者の役割であり、責任なのである。

このような参加型アクションリサーチは、具体的な他者の声に応答する。それは、抽象的な倫理的基準に関することでも、他者を想像して倫理的に応答していくことでもない。具体的な声に応答するという、日常の行為そのものなのである。それゆえ、参加型アクションリサーチは、単なる方法論であるというだけでなく、他者への応答責任を果たすという学問の基本的な姿勢に貢献しうるゆえ、社会研究の条件のひとつとなるのである。

5. おわりに

「参加型アクションリサーチ」は、求められる。というよりも、「参加型アクションリサーチ」は、そうせざるをえない条件となりうる。質的調査は、調査行為のみに専心する社会学者だけのものではなくなる。教師、保育者、カウンセラー、その他あらゆる専門家の条件ともなりうる。そのことを、批判的教育学質的調査研究を進めていく中で、さらに示していくことが、今後の課題である。

注

- 1 本研究では、“research”という言葉をもとに、「研究」ではなく、「調査」と訳している。この訳語を採用する理由は、本研究で中心となる研究者であるキンチェローの著書である『調査者としての教師：エンパワーメントへの道すじとしての質的探究』（2012年）の本によるところが大きい。すなわち、キンチェローの共同研究者のひとりであるシェリー・R・スタインバーグが説明するように、「調査と先鋭的な実践とを接続しうるような、エンパワーメントの政治的な行為としての質的調査を再創造する」〔Steinberg: 2012, p. vii.〕というように、“research”はあくまで「行為」(act)なのである。それゆえ、静的なイメージのある「研究」ではなく、「調査」という訳語を用いた。
- 2 批判的教育学と、先述したデンジンとは、教育学者と社会学者という立ち位置を見ると、一見するとつながりがないように思われる。しかしながら、デンジンは『パフォーマンスエスノグラフィー：批判的教育学と文化のポリティクス』（2003）以後、批判的教育学の仕事を多く引用している。デンジンは、批判的教育学者の第一人者であるピーター・マクラレンや、ヘンリー・ジル（Henry Giroux）を引き合いに出しつつ、「批判的、協力的、パフォーマンス的なペダゴジーは、経験の優位性（primacy of experience）、声の概念（concept of voice）、そして教室を民主主義的な公共圏に変えることの重要性（the importance of turning classrooms into democratic public spheres）を中心となす教育学」〔Denzin: 2003, p.31〕ということを示している。また、先述したスタインバーグは、「ジョー（キンチェローのこと、筆者注）の用語、概念とブリコラージュ（キンチェローが提案した質的調査の方法論）の用法は、ノーム・デンジン（ノームはノーマンの略称、筆者注）とヤヴォナ・リンカン（Yavonna Lincoln）の仕事から来ている」〔Steinberg: 2012, p. ix〕と説明している。このように、批判的教育学と質的調査研究は、2000年代以降の研究動向と連動している。このことの詳述は避けるが、今後の筆者の研究によって明らかにされる予定である。
- 3 質的調査が局所的な事例への調査研究となっていることは、ポストモダンの転回以後はある種自明なように思える。その中でも、ポストモダンの転回以後の質的調査研究にはいくつかの理念の方向性がある。その一つに、キャロリン・エリス（Carolyn Ellis）、ステーシー・ホルマン・ジョーンズ（Stacy Holman Jones）ら南フロリダ大学社会学部の研究者たちによる「自伝的エスノグラフィー」（autoethnography）という方法論がある。この研究は、個々人の経験を探究の中心とし、自己自身の内省によって言語化することに重きを置いている。アダムズらによると、「自伝的エスノグラフィーによって、われわれは自己自身、他者、文化、ポリティクス、社会的研究（social research）に専心するために自身の経験を用いる」〔Adams et. al.: 2015, p1.〕と説明している。自分自身の経験を、他者、ポリティクス、文化、社会構造といった社会学の研究領域の諸対象とつなげることで、自分自身の苦しみを質的調査の対象として探究することを可能にするのである。この「自伝的エスノグラフィー」は、自己自身の経験というもっとも局所的なものを対象としている点で、ポストモダンの転回の代表的な一つと位置づけることができる。また、ポストモダンの転回を引き受けたこと

で、局所的な対象こそが研究対象にふさわしいと考えている点でも、代表的なものを見出すことができよう [Adams et. al.: 2015, p12.]。

- 4 現在、“Youth Participatory Action Research” (略称YPAR) という言葉は、多くの著作で見られている表現であるものの、“Youth led Participatory Action Research” という言葉も存在している。その意味は、双方とも共通しているものの、本研究では前者は「若者の参加型アクションリサーチ」と訳している。後者は、「若者主導の参加型アクションリサーチ」と訳されている。

[参考文献]

- Adams, Tony, Stacy Holman Jones, Carolyn Ellis, *Autoethnography: Understanding Qualitative Research*, Oxford University Press, 2015.
- Becker, Howard, “Whose Side Are We on?”, *Social Problem*, Vol. 14 (3), 1967, pp.239-247.
- Cammarota, Julio, Michelle Fine, “Youth Participatory Action Research: A Pedagogy for Transformational Resistance”, Julio Cammarota Michelle Fine ed., *Revolutionizing Education: Youth Participatory Action Research in Motion*, Routledge, 2008, pp.1-11.
- Denzin, Norman, *Performative Ethnography: Critical Pedagogy and the Politics of Culture*, Sage Publication, 2003.
- *Qualitative Inquiry under fire: Toward a New Paradigm Dialogue*, Routledge, 2009.
- *Interpretive Autoethnography (2nd Editon)*, Sage Publications, 2014.
- *The Qualitative Manifesto: A Call to Arms*, Routledge, 2019.
- Ellis, Carolyn, Arthur P. Bochner, “Telling and Performing Personal Stories: The Constraints of Choice in Abortion”, Carolyn Ellis, Michael G. Flaherty ed. *Investigating Subjectivity: Research on Lived Experience*, Sage Publications, 1992, pp.79-101.
- Gabriel, Yiannis, “Reflexivity and beyond: a Plea for Imagination in Qualitative Research Methodology”, *Qualitative Research in Organizations and Managements International Journal*, vol.10 (4), 2015, pp.332-336.
- Hammersley, Martin, Anna Trainou, *Ethics in Qualitative Research: Controversies and Contexts*, Sage publication, 2012.
- Kincheloe, Joe, *Critical Pedagogy (2nd edition)*, Peter Lang Primer, 2008.—
- *Teachers as Intellectuals: Qualitative Inquiry as a Path to Empowerment*, Routledge, 2012.
- McTaggart, Robin, “Participatory Action Research: issues in Theory and Practice”, *Educational Action Research*, vol.2(3),1994, pp.313-337.

Steinberg, Shirley, “Research as an act of enlightenment, empowerment, and resistance”,
Joe Kincheloe, *Teachers as Intellectuals: Qualitative Inquiry as a Path to Empowerment*,
Routledge 2012, pp. vii-xix.

キンチェロー、ジョー、ピーター・マクラレン著、池田寛著「批判理論および質的研究再考」
N・K・デンジン、Y・S・リンカン著、平山 満義監訳、岡野一郎、古賀正義編訳『質的研究
ハンドブック：第1巻質的研究のパラダイムと展望』北大路書房、2006年、243-271頁。

グリーンウッド、デイヴィッド、モーテン・レヴィン著、前田征三訳「アクション・リサーチ
による大学と社会の関係の再構築」、N・K・デンジン、Y・S・リンカン著、平山満義監訳、
岡野一郎、古賀正義編訳『質的研究ハンドブック：第1巻 質的研究のパラダイムと眺望』北
大路書房、2006年、63-85頁。

ケミス、スティーブン、ロビン・マクタガート著、関口靖広訳「参加型アクション・リサーチ」
N・K・デンジン、Y・S・リンカン著、平山満義監訳、藤原顕編訳『質的研究ハンドブック：
第2巻質的研究の設計と戦略』北大路書房、2005年、229-264頁。